ひだまり農場の

田んぼの風便り

2006年10月10日

ー作る顔と田んぼが見えるお米をー

山梨県北杜市高根町五町田　TEL 0551-47-3238

待ちに待った秋の高気圧がやってきました。
例年に比べたら一週間も遅い
稲刈りのスタートです。
激しい残暑のあとは荒れ模様の秋の長雨
大候異変は赤トンボにも…
アキアカネは里帰りの時期を失したのか？
ノシメトンボばかりが眼につきます。

今年の米作りを振り返って

草の減った田んぼ

７月の日照時間が平年の半分もなかった今年…収穫の時期を迎えてみると、茎数がやや淋しい田んぼ、肥料を持ち越し倒伏したり登熟が上手く進まない田んぼ…など、なかなか思うような米作りが出来ないなぁ、と思う反面、去年に比べたら嘘のように草が少なかった理由を考えています

農薬や化学肥料に頼らずに田んぼを作る僕たちを一貫して悩ませ続けた草はコナギでした。この草が田んぼ一面を覆ったら、稲の生育がピタリと止まる。体力の限界が来るのが先か、有効な除草法が見つかるのが先か…果てしのない草取りを続けながらその様子を観察するうちに、一枚の田んぼでもコナギが密生するところは限られる…彼らは未分解のワラや切株を養分にしているみたいだ！とか、どうも水捌けの悪いところが好みらしい？とかいうことに気付いたのです。

だとすれば、彼らの好まない条件を手当てすれば良いのではないか？取り組みの初めは田んぼの水捌けを良くすることでした。今僕たちが作っている田んぼは１５年前に″基盤整備事業″という土木工事で新たに作り換えられたものです。それまでの自然の高低差に沿った形の棚田や細やかな水路を潰して、宅地造成したみたいな田んぼが出現しました。ところが、遮断されたかつての水道が出口を求めて田んぼのアチコチで吹き出る、しかし、まるでプールのような田んぼで地下浸透が全くないから、一度水を入れれば１週間も水の補給をしなくても良い…といった按配だったのです。湧き出す地下水を排出する切り回し水路を新たに作り、転作麦や野菜の作付け前にはサブソイラーという機械を入れて基盤整備で固められ過ぎた耕盤を割る作業を続けました。

もうひとつのコナギ対策は″生ワラ処理″でした。今の稲作では、脱穀後のワラはただ刻まれただけで田んぼに戻されます。このワラが翌年の田んぼで悪さをすることがあるのです。つまり、ワラが腐り切らないままに冬を越し田植え後に分解が始まるような状態にしてしまうと、稲に根腐れは出るは、害虫は付き易くなるは、そしてコナギの大発生に繋がります。春先に稲の元肥としていた鶏糞散布を、秋の刈り取り直後に変えました。鶏糞はワラを分解する微生物のエサと考えよう、そしてワラの鋤き込みも気温が下がらない１０月中には終わらせるようにしよう…収穫作業で気忙しい時期の仕事でしたが、これを続けて４年が経ちました。コナギが減って宿根性のオモダカやクログワイが増えてきました。藻類やウキクサが水面を被覆するような田んぼが現れ始めました。そして今年…停滞することのない水がいつもきちんと張られ、イネがすくすくと育つ田んぼ環境が用意されさえすれば、コナギも恐るるに足りず？…かすかな光が見えた気がしています。

この間の試行錯誤で草の生え方や種類が変化してきた…その訳が明らかになって、抑草法をしっかりと確立できるまでにはまだまだ試行錯誤が続くでしょう。しかし考えてみれば、田んぼは人の手が加わって作られた自然…田んぼに生まれてくる動植物の姿は、田んぼ仕事の中身を反映しているはずです。除草剤の力で草を見なくて済む様になったのはたかだかこの４０年のこと、それ以前の、人が今よりも濃密に自然と関係を持っていた長い時代には、本来あるべき田んぼの姿と、その自然と折り合いをつけていた百姓仕事が完成していたのだと思うのです。かつての姿を取り戻すことは容易なことではないのでしょうが、多くの自然を育むために努力することで、自然から人は多くの恩恵を受けることができる…という関係を再認識しないといけないのだと思います。
田んぼの動植物が発するメッセージを注意深く観察し、その意味を自分の百姓仕事との関わりで考えること…今続けている生き物観察も、田んぼを田んぼ本来の姿に戻すための一歩として大切な足がかりなのです。

今年草が減った田んぼの刈り跡の様子です。
７月？になって遅くに芽吹いたコナギがチラホラあるだけ、
特徴的なのは、田んぼ一面を覆い尽くしていた藻類の名残りがここかしこに見られることです。
この田んぼの草取り作業は、除草機を１回通しただけ…
草？（藻）が草を抑えていたんだね。